

〔歴史随想〕

國史研究会草創期の一人・佐藤仁先生

工藤 清泰

はじめに

二〇二〇年(令和2)一月六日、本会委員を歴任された佐藤仁(さとう・ひとし)氏は永眠した(以下敬称略)。前日には稲葉克夫氏(一九三二～二〇二〇)も逝去、令和初の正月になって青森県歴史学界に足跡を残した二人を失ったことになる。稲葉氏は、県文化賞や東奥賞を受賞していたため地方紙上で氏の業績や事績を大きく取り上げられたが、佐藤が取り上げられることはほとんどなかった。

このことは、研究内容の評価や執筆・著作の数に関係なく、頑固を地とする佐藤の人間性に起因していたかも知れない。校正を重ねる自らの論考に対して、編集担当を抜きに朝早く印刷所まで押しかけて修正する佐藤の姿は、一面では常軌を逸した研究者の姿を見せていたが、取りようによっては自己の文章に責任を持つ強い意志があったはずである。さりとて、筆者自身の個人的視野から見た場合、「エイヤツ」と割り切る度量が不足していたからに他ならない、と考えている。

いずれにしても、佐藤の足跡を残しておくことは、青森県内における学史研究と今後の歴史研究に資する面があると考え、生前に仲たがいし

た筆者であるが、仲間の意見を拾いつつ足跡をまとめることにした。

佐藤仁先生の経歴

佐藤は、一九三三年(昭和8)三月八日新潟県柏崎市で出生。五一年(昭和26)新潟県立柏崎高等学校卒業、同校では郷土部に所属していた。五年(昭和31)弘前大学文理文学部文学科(国史学専攻)卒業、同年四月、私立柴田高等学校講師となり後に教諭。五九年(昭和34)県立金木高等学校相内分校教諭、六二年(昭和37)金木高等学校全日制教諭。六五年(昭

和40)四月、県立弘前南高等学校教諭。七八年(昭和53)県立弘前高等学校教諭、九三年(平成5)三月同校定年退職。九〇年(平成2)弘前市史執筆協力員。九四年(平成6)浪岡町史編集委員長・同編集室長。九六年(平成8)青森県文化財保護審議会委員、同年青森県史専門部会・中部会専門委員。市町村文化財審議委員(旧浪岡町・弘前市・旧中里町など)。そのほかに青森県「歴史の道」調査専門委員、青森県中世城館調査の委員、青森県教育委員会の発掘調査に係る調査員、青森県近代化遺産の調査員などを歴任している。また、市町村教育委員会から委嘱されている調査員等は数多くあったと見られるが、現在となつては確認不能となつてから割愛することをご了解いただきたい。

國史研究会草創期の頃

佐藤の自宅に『弘前大学國史研究』創刊号が三冊残っていた。

弘前大学で教鞭をとった虎尾俊哉氏(一九二五―二〇一一)は、同誌一〇〇記念号の巻頭に「『弘前大学國史研究』創刊の頃」という随想を載せていて、発刊意図を他大学等との交換誌にしたいという功利的動機とともに、「旧来の郷土史家に代わる新しい地方史の専門家を育てる場を作りたいという目論みもあったし、卒論の中には、その一部なりとも公にしてやりたいとの思いに駆られるものもあった。」と記している。後段における卒論の周知という面では、佐藤の卒論である「上代地方区画制度 余戸の研究(昭和30年度)」を「律令時代に於ける郷の分割について」と改題して、いの一冊に創刊号へ掲載している。

佐藤の実力を評価していた指導教官・虎尾氏と宮崎道生氏(どちらも文理学部助教授の時)の配慮と思われる。

小館衷三氏の筆跡が多いガリ版刷りの初期『弘前大学國史研究』において、佐藤は第六号で「研究餘録 「あまりべ」條について(日本歴史大辞典所収)」を提示、辞典の記述に対する不審を表している。以下、第七号・第九号までは古代関連の論考、第一七号から近世の交通関連論考が多くなる。当時は二か月に一冊を発刊するペースであった。

特に第三九号に発表した「近世交通碑文・追分石小考」は、津軽地方に所在する23か所の追分石を踏査して書き上げたもので、保存措置の必要性まで主張した論考であった。発表後、宮崎氏には新聞に紹介してもらい、虎尾氏からは「佐藤は、論文を足で書く」とほめられたことを、自らの榮譽として後輩達に話していた。このことは、その後の研究方向を決定したと、絶筆(二〇一八年二月「地域史探訪・景観から歴史を読む98街道を歩いて70年」『北の街』北の街社)と想定される中にも記している。よほどうれしい気持ちになっていたこと、そして生涯にわたって二人の恩師への敬慕の念を持ち続けていたことを理解できる。

自宅には、「追分石小考」に関わるスライドが入ったまま残されていた。一九六三年(昭和38)一月から、論文掲載後の六五年七月までの調査写真で、約二百枚のスライドは、弘前大学國史研究会第六回大会(六五年五月二日人文学部で開催)で使用したものも含まれ、巻頭スライドには「追分石小考 HS」の手作り題名が見える。研究発表にパワーポイントを使用することが一般的な現在、過去には印刷資料の配布かスライドによる説明が主流で、視聴覚教育を得意とする佐藤は、スラ

イド発表の先駆けとなっていた。

筆者に佐藤の初期論考を評価できる能力はないが、自宅書庫の最深部に残っていた赤鉛筆だらけの参考書は、大学生時代の國史（日本史）に対する格闘を物語るものと推測された。『新日本史大系第2巻 古代社会』（一九五四年 再版 朝倉書店）、井上光貞『大化改新』（一九五四年 要書房）、肥後和男『風土記抄』（一九四三年 三版 弘文堂書房）、和辻哲郎『新稿 日本古代文化』（一九五一年 岩波書店）のほか、黒板勝美の概説図書が揃っていることにも研究の本道を感じる。

さらに、注目すべき点は考古学関係の図書も見られたことである。柏崎高等学校時代から郷土部に所属して遺跡見学に歩いていた事も一因と思われるが、購入時期をみると大学に入学してからの図書が多い。佐藤自身の自発的な意志なのか虎尾氏らの警咳に接したことからの要因かは分らない。齋藤忠『上代における大陸文化の影響』（一九四七年 大八洲出版）、八幡一郎『日本史の黎明』（一九五三年 有斐閣）、『日本考古学講座第一〜七巻』（一九五五〜五六年 河出書房）などである。

これらの蔵書を見る限り、佐藤の気持ちの中には研究者としての道を歩みたい意志は十二分にあったはずである。しかし、父を戦争で亡くした母子家庭で、弟の学費等を工面するためには就職の道がなく、卒業後は私立柴田高等学校で講師・教諭となって、一九五九年以降は県立高等学校教員の道を歩むことになる。

考古学への興味

『弘前大学國史研究』創刊号の彙報欄には、「◎県内における研究活動―考古学篇」の項目を設けて、昭和三十一年四月〜八月までの考古学関係記事8点を記載している。おそらく新聞記事の抽出であるが、國史研究の一角に考古学分野を認めていたことを感じる。

① 四月九日、上北郡大戸村金矢部落で弥生式文化、二千年前のものらしい土器発見。② 四月一八日、南郡大鰐町阿闍羅山麓で、縄文後期の四脚で精巧な彫りを持つ石皿発見。③ 四月二四日、八戸市是川遺跡重要文化財本指定のために文部技官来八。④ 六月二六日、中郡岩木村岩木神社附近に約千年前の山岳崇拜の祭壇遺跡らしきもの発見。⑤ 六月二七日、岩木山麓の遺跡予備調査のため早稲田大学考古学教室桜井清彦講師来弘。⑥ 七月二四日、南郡浪岡町で石皿、石槌、無頭石棒発見。⑦ 八月九日、青森市三内で慶大考古学班と同大学助教清水潤三氏が縄文中期の層位関係及び円筒式文化究明のため来青。⑧ 八月三十一日、三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚で慶大文学部考古学教室江坂輝彌氏一行が縄文早期の住居跡発見及び日本最古の『返し』のついたモリを発見。（原文を簡略化）

この彙報欄を編集した人物を特定することはできないが、遺物・遺構の発見や考古学関係者の動きを的確にとらえた彙報で、筆者はもしかしたら佐藤の関与があったのではないかと推測している。確かに⑦と⑧の部分は『日本考古学年報9 昭和31年度』（復刻版一九八二年 日本考古学協会編・刊）の清水潤三・江坂輝彌氏の報告内容と一致することから、事実記載である。

また⑤に出てくる桜井清彦は、一九五三・五四（昭和28・29）年に相

内村（現五所川原市）二ツ沼遺跡の発掘調査をして堅穴から青磁等の中世遺物が出土することを報告している。調査から五年後の一九五九年（昭和34）に佐藤が赴任する県立金木高等学校相内分校は、まさに十三湊を中心とする安藤氏の事跡が多い場所であり、佐藤の蔵書中にも桜井の「青森県相内村二ツ沼遺跡について」（一九五五年『史観』早稲田大学史学会）は存在して、鉛筆による傍線箇所が多数みられることから、佐藤の十三湊・安藤氏の研究はこの段階から始まっていたとみられる。

村越潔氏との出会い

佐藤は本研究会創立の二年後、一九五八年（昭和33）七月に弘前大学教育学部助手として赴任する村越潔氏（一九二九～二〇一一）と運命的な出会いをする。村越氏は、日本大学文理学部を卒業して、五三年（昭和28）四月から二年間、柏崎高等学校教諭の職にあった。しかし、教職よりも考古学研究への志を押さえることができず同校を退職、日本大学文理学部の助手となった後、恩師・八幡一郎氏の推薦もあり弘前大学へ赴任している。柏崎高等学校在職中は、当然のことながら「郷土部（地歴部）」の顧問となって文化祭の時は自らの登呂遺跡発掘調査の経験を活かし、生徒達に弥生式堅穴住居復元模型の指導を行っている。

佐藤は「村越潔先生と刈羽・柏崎」（二〇一一年『村越潔先生追悼集 古代VS現代』村越潔先生を偲ぶ会刊）の中で、五三年（昭和28）夏、大学の夏休みを利用して同校郷土部に顔を出した時に、初めて村越氏と会ったこと、そして村越氏逝去にあたっての感慨を次のように記している。

（前略…初対面の）あの時の笑顔はずっと続き、いつまでも、どこまでも変わらなかった。（中略）郷土部の部誌「郷土研究」に掲載した稚拙な私の報告にも目を通して熱心に質問され恐縮した。（中略…柏崎高校を退職した）3年後村越先生は弘前大学に赴任され、我が家を訪問してくださいました。偶然の出会いと突然の再会、世の中は狭く縁は深いものだ。以後、ご逝去までのご活躍と業績は私に感動と励みを下さった。また随分とご迷惑もお掛けした。（後略）

この文章を書いた時の佐藤の肩書は、「弘前大学國史研究会会員」であった。

村越氏の赴任理由であった岩木山麓の発掘調査でも二人の親交は深まる。五八年（昭和33）九月からの薬師I号遺跡と、翌五九年（昭和34）五月からの常盤野・九十九森・黒森遺跡に、発掘担当者（調査員）・村越氏と調査補助員・佐藤の名前があつて、両者が発掘現場で同じ釜の飯を食っていたことを確認できる（一九六三年『岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会）。佐藤は、柴田高等学校に在職しながら調査に参加したと思われるが、「弘前考古学研究会」の記載もあることから同会会長であった成田末五郎氏（一八九五～一九七九）の薫陶も受けて、文理学部卒業生の中では考古学への興味が最も強かったと思われる。後年、村越氏が円筒土器文化研究を進める契機は、薬師I号遺跡で見た土器出土状態（円筒下層d1式）と記しているが、佐藤も同じ出土状態を見ていたかも知れない。

高校教諭となつて、金木高等学校では自ら生徒達と深郷田遺跡の発掘調査を実施、弘前南高等学校・弘前高等学校では夏休みに生徒達を発掘

現場に引率していた。筆者が見ている現場は、村越氏が発掘担当であった旧平賀町石郷遺跡、旧浪岡町浪岡城跡などである。佐藤のこのような姿勢は、文献史学だけにこだわらぬ、考古学や民俗学も含めた歴史学研究・地方史研究への志向があったと思われる。

一九七〇年以降、県・市町村の行政発掘調査における指導的立場となった村越氏は、このような佐藤の研究姿勢を理解していたため、各遺跡に対する文献的考察を依頼することが多くなった。以後、佐藤は県教育委員会・市町村教育委員会等が発刊する発掘調査報告書に多数の原稿を掲載している。

自治体史編纂のなかで

佐藤は一九六五年（昭和40）の『中里町誌』を皮切りに、自治体史の編纂に関係する。経歴でも示しているように、『新編弘前市史』、『浪岡町史』、『青森県史』などであるが、いずれの自治体史においても最後まで

で完結する姿を発見できない。

例えば『新編弘前市史』においては、『新編弘前市史資料編1—2古代・中世編』の中で「第四章 弘前地域の金石文」としてまとめ、ほぼ県内の板碑等を集成したにもかかわらず、執筆予定であった通史編の執筆を断念してその成果を叙述することはなかった。また、浪岡町史に関しては、次のような経緯があった。

弘前高等学校を最後に、高校教員を退職した佐藤は、九四年（平成6）七月一日に浪岡町史編集委員長・同編集室長に就任する。昭和の合併から四〇年目をむかえ、町史編纂に取り掛かろうとしていた浪岡町からの三顧の礼に応える就任であった。同年八月の町広報に、出身地や歴史研究を始めたきっかけを聞かれ、「柏崎高校時代に郷土（史研究）部に入り、その時の恩師（鈴木繁三先生）の影響が強かった」と述べ、町史づくりにあたっては「町民のための町史、気軽に読んでもらえるものでも、内容的にはレベルの高いものにした」とその抱負を表明している。

ところが、広報なみおか等に「町史研究余録」と題して、七〇回に亘るコラムを執筆していたにもかかわらず、自らが担当していた町史第二巻の浪岡北畠氏関係の原稿は、いつまでたっても完成しなかった。平成の合併による浪岡町消滅も近づき、町史完結がおぼつかなくなる中で佐藤の編集室長としての力量が問われていた。佐藤は『浪岡町史第一巻』（二〇〇〇年 浪岡町）で編集委員長としての「あとがき」を書いた一年後、浪岡町史編纂事業から撤退する。前述した村越潔先生追悼集で「随分とご迷惑もお掛けした」と記すのは、浪岡町史監修者であった村越氏に対する謝罪である、と思う。

以後、青森県文化財保護協会での活動やNHK文化センター弘前教室の講師、最後は月刊誌『北の街』に交通史研究者として「地域史探訪」のコラムを執筆しながら最晩年をむかえ、人生を全うした。

おわりに

『新編弘前市史』の監修者であった虎尾俊哉氏は、市史編纂過程における原稿遅滞時の編集会議で、出席していた執筆者に対して、「エイヤツ」と対応すべき「時」があると話していた。虎尾氏は、実力を認めていたからこそ、弟子・佐藤に対する奮起を促していたのではないかと思えてならない。

虎尾・村越両氏をはじめ佐藤と親交のあった人達は鬼籍に入った人が多く、若き佐藤の人となり聞く機会はなかったが、『弘前大学國史研究』の創刊号を飾った研究者として語り継ぐ一人であったことは間違いない。おしむらくは一冊の単著も残さずに他界したことである。コラム的執筆は多数に上るが、本来、佐藤の著作となるべき「浪岡北畠氏の研究」・「青森県交通史の研究」・「青森県石造物・金石文の研究」などは、調査に追われて、刊行本としてまとめることが苦手な佐藤の一面を示している。

本稿を執筆する契機は福井敏隆氏の助言から始まり、齋藤淳・鶴巻秀樹・榎原滋高・中田書矢・伊東信・木村真明・佐藤光男・工藤智樹氏らの協力を得た。また佐藤の教え子達が自宅の後かたづけに精を出す姿を見ながら、教師として慕われていた佐藤を偲ぶことができた。皆様に衷

心よりお礼申し上げます。

最後に、佐藤の執筆・著作項目は、別に協力者全員で手分けしながら取りまとめ、一九五六（昭和31）～二〇一八年（平成30）の間に二四〇余を確認したが、柏崎高等学校時代の論考など遺漏も多いと予想される。この一覧は、本年四月に柏崎で行われた葬儀に間に合わせて作成し、墓前に提示いただくため、新潟県柏崎市の佐藤家本家で従兄弟である佐藤誠氏に送付した。

追悼文であっても故人の評価は、歴史的事実を踏まえなければならぬ。辛口の文章になったことは深く陳謝するが、佐藤に対する敬慕の念は、協力者や教え子達とまったく同じで、感情は感情、研究成果は研究成果、と考えるの執筆だった。

佐藤仁先生の御霊に合掌するのみである。（二〇二〇・七・三〇）

（くどう・きよひと 弘前大学國史研究会会員）

佐藤仁先生『弘前大学國史研究』執筆一覧

No.	執筆論文等	号数	発刊年月日	備考(勤務校名)
1	律令国家に於ける郷の分割について	創刊号	昭和三十一年一月三〇日	柴田高校
2	研究餘録「あまりべ」について	第6号	昭和三十三年八月三一日	〃
3	本会第一回大会研究発表要旨 奈良時代初期に於ける地名改正の過程について	第7号	昭和三十三年一〇月三一日	〃
4	国・郡分割と藤原氏―奈良時代初中期を中心とした	第9号	昭和三十三年二月二八日	〃
5	津軽三関について	第17号	昭和三十四年六月三〇日	金木高校
6	第二回大会研究発表要旨 近世津軽地方の交通について	第17号	昭和三十四年六月三〇日	〃
7	信政時代における交通問題―土木事業を中心として	第23号	昭和三十五年一月一日	〃
8	研究余録 津軽藩における江戸・国許連絡―藩宮飛脚について	第33号	昭和三十八年五月三〇日	〃
9	近世交通碑文・追分石小考	第39号	昭和四〇年五月五日	弘前南高校
10	第六回大会研究発表要旨 近世交通碑文・追分石小考	第39号	昭和四〇年五月五日	〃
11	新刊紹介 大類伸博士監修日本城郭全集1―「北海道・青森・岩手・秋田編」	第48・49号	昭和四二年一月三〇日	〃
12	彙報(最近における青森県関係図書の刊行状況)	第50号	昭和四三年三月三〇日	〃
13	文化財公開施設と日本史の授業	第53号	昭和四四年六月三〇日	〃